

よりよい学級の生活づくりに向けて、互いに尊重し、よさを認め合う子どもを育成するためにはどうあればよいか（第二年次）
 —子どもと教師のマネジメントサイクルの関連付けを通して—

長期研究員 佐藤 和仁

I 研究の趣旨

一年次は、特別活動、特に学級活動を中核として教師の意図的・計画的な指導（教師のマネジメントサイクル）の在り方についての研究を深めてきた。その中で見えてきたことは、所属感、自己有能感といった学びの実感が子どもの自主的な力をはぐくむための大切な原動力になるということである。さらに、こうした実感をより深めるためには、子どもたち自身が計画を立て（Plan）、実践し（Do）、振り返り（Check）、次の活動へ生かす（Action）という自主的な一連の活動（子どものマネジメントサイクル）が重要であることも見えてきた。

そこで二年次は、子どもの学びの実感の伴った自主的なマネジメントサイクルと教師のマネジメントサイクルの関連を図ることにより、主題で求める子どもの姿に迫ることができるのではないかと考え、副主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

以下の視点に基づき具体的な手だてを講じていけば、主題で求める子どもの姿をはぐくむことができるであろう。

【視点1】子どもの改善点を踏まえたテーマスキル※1の設定と指導計画作成
 【視点2】子どもたちの経験のよさを生かした事前の活動の指導
 【視点3】学びの実感を大切にす見取りと価値付けの在り方
 【視点4】テーマスキルと子どもの振り返りを関連させた改善の検討
 ※1 学級集団の育成上の課題解決に必要なスキル

2 研究の内容

所属感、自己有能感を実感させ、自主性の伸長を図るためにマネジメントサイクルを3回（一年次ステップ4からの継続としてステップ5～7）繰り返す、研究を進める。マネジメントサイクルの関連付けにおいては子どもの学びの実感を適切に反映させた教師の意図的・計画的な指導を実現するために、教師のPDCAが子どものPDCAを一つ先行するように位置付けた（図1）。

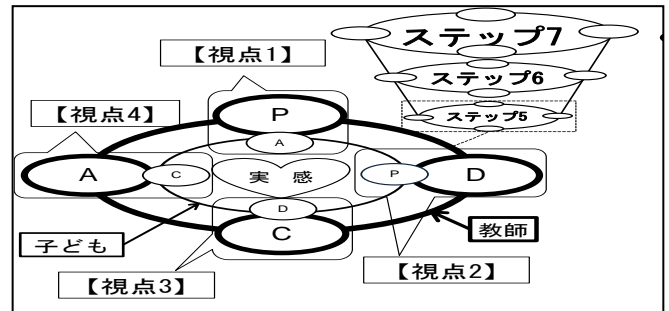


図1 マネジメントサイクルの関連付け

3 子どもの育ちを見取るために

研究主題に迫るために不可欠な所属感、自己有能感、自主性の高まりは、以下の方法で確認する。

- 所属感、自己有能感アンケート※2
- 自主性アンケート※3
- ディスカッションダイアグラム※4による話し合い活動の分析
- ※2 岡澤らによる「運動有能感測定尺度」を参考に作成
- ※3 石川、藤原による「DTI自主性診断テスト」を参考に作成
- ※4 話し合い活動における発言を時系列・内容別に分類し記録したもの

4 研究の実際（対象児童：第4学年32名）

【視点1】について（教師Plan）

子どもが、前回の活動を今回の活動に生かす（A）ために、振り返りカードや計画委員会ファイルを活用して続けたい活動や改善点を話し合う機会を設けた。教師は自主性をはぐくむために、ここで出された考えや言葉を生かし、小学校学習指導要領解説特別活動編における「発達の段階に即した指導のめやす」も参考にしてテーマスキルを設定し、それを軸に指導計画を作成した。

例えばステップ5では、前ステップの振り返りで子どもから多く出された「学級のみんなが」「楽しく」「うれしくなる」という言葉を生かしてテーマスキルを設定した。それを軸に、子どもたちが自分も相手も楽しめ、お互いが納得できる解決の方法を考え実践できる「話し合いのめあてづくり」や「提案理由の共有化」などの指導計画の作成をした。各ステップのテーマスキルは、以下のとおりである。

ステップ	テーマスキル
5	自分や周囲の友だちの思いや願いを大切にし、お互いが楽しくなる解決方法を考え、実践する。
6	自他の思いや願いを大切にし、学級の一体感をめざした解決方法を考え、実践する。
7	自他の思いや願いを具現化し、学級の一体感を味わうことのできる解決方法を考え、実践する。

【視点2】について（教師Do）

子どもたちが計画（P）を立てる際、経験からよりよい活動を自主的に生み出せるよう、まず計画委員会に指導し、前回の振り返りカードに見られた思いを生かして話し合いのめあてづくりをさせた。このことにより、これまでの経験を生かしてさらに充実した活動をめざすという意識を高めることができた。次に提案理由とめあての共有のために、前回の学級活動における経験のよさを実感できるビデオを作成し、視聴させた。ステップ6ではゲーム「手つなぎだるまさんが転んだ」を通して「全員で一つの活動をする難しさ」や「協力して達成する喜び」といったテーマスキルにつながるような意識付けをして話し合いに臨ませた。このような手だてによりテーマスキルや提案理由、話し合いのめあてを自分のものとしてとらえさせていった。

【視点3】について（教師Check）

子どもたちが話し合い活動や集会活動を実践（D）する様子をテーマスキルに沿った視点で見取り、その瞬間を逃さずに価値付けを行った。

ステップ7の集会の様子からは、完成させた巨大パズルを満足そうに見つめ、その喜びを祝って心から楽しそうにダンスをする姿が見られた。こうした姿に対して「それぞれの思いや願いを生かしながら具現化したすばらしい発想である」「共に活動してきたこの仲間達成したからこそ、この喜びがある」といったテーマスキルを基にした価値付けをしていた。ディスカッションダイアグラムからは、巨大パズル内のキャラクターが持つ旗のデザインについて紆余曲折しながらも、様々な考えのよさを生かして集団決定に至ったことが読み取れた。他にも、活動の終末における教師の話や実践をまとめた掲示物（「学級会のあゆみ」）を活用して価値付けを繰り返し、学びの実感を確かなものにした。

【視点4】について（教師Action）

子どもの振り返り（C）から見いだせる学びの実感と、教師がとらえた課題とを関連付けて、次ステップのテーマスキル及び指導計画の検討を行った。

ステップ6の振り返りカードからは「みんながもり上がるためにがんばれた」といった満足感や「心

が一つになると、もっと活動が楽しいのに」といった次の活動への期待感が見いだせた。こうした実感と、「学級の一体感をめざすことはできたが、そのよさを十分に味わえなかった」という教師がとらえたステップ6の課題を関連付けることで、ステップ7のテーマスキルと指導計画の検討に至った。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

実践前後のアンケートの変容を見ると、所属感や自己有能感が深まったことが分かる。また、「自分のやりたいことをすすんでやる（自発性）」「前のやり方を参考に、少し違った方法を工夫する（独創性）」といった自主性も高まっていることが分かる（図2）。

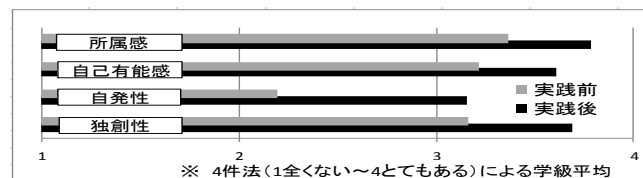


図2 「所属感, 自己有能感, 自主性アンケート」

話し合い活動をディスカッションダイアグラムを用いて分析すると（図3）、ステップを重ねるごとに所属感, 自己有能感に関わる発言が増えていることが分かる。また、発言のつながりをたどると、話し合いのめあてを大切にし、少数意見のよさも十分に吟味して生かそうとする姿が多く見られるようになった。

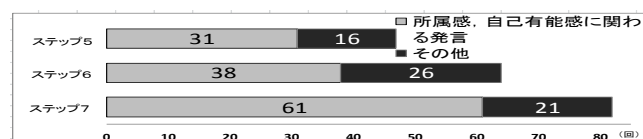


図3 学級活動(1)発言内容別の回数

抽出児A・Bの変容に着目する。Aは次第に学級全体を考えた言動が増え、思いを具現化する中で所属感を高めていくことができた。Bは徐々に自分の思いを表出するようになり、それとともに自己有能感の高まりを感じることで言動が多くなった。それぞれ主題に迫る姿の表れといえる。

2 今後の課題

今後は、低学年や高学年、異年齢集団（児童会活動やクラブ活動など）における子どもと教師のマネジメントサイクルの関連付けの在り方について研究を深めていきたい。